

2 薬剤師が活用できる一般用医薬品の情報を

JASDI フォーラム

日本医薬品情報学会 (JASDI) の 2003 年度第 3 回 JASDI フォーラムが 11 月 20 日、「これからの OTC 薬」をテーマに開催された。シンポジウムの演者からは、医療関係者向けの一般用医薬品情報の不足が指摘され、「OTC 薬については、生活者と医療従事者が同程度の情報しか持っていない」との意見や、OTC 薬についても医療用医薬品と同様、「インタビューフォーム」のようなものが必要、との提案がみられた。

添付文書では配合理由が わからない

フォーラムで基調講演した山崎幹夫同学会会長は、OTC 薬の添付文書の記載要領見直しなど、生活者向けの医薬品情報提供については体制が整いつつある一方、医療従事者向けの情報が依然不足していると指摘。薬剤師が生活者に説明する際にも、添付文書では情報が不足しているとの認識を示した。

その 1 例として、OTC 薬で多い配合薬について、その配合理由が添付文書には記載されていないことを紹介。ある薬では、OTC 薬には医療用薬の 75% しか有効成分が入っておらず、



日本医薬品情報学会会長
山崎幹夫氏

その代わり漢方薬との配合になっているが、その理由が不明だった。山崎氏がメーカーに問い合わせたところ、治験も行い、配合によって目的の薬効を果たしていることがわかったが、「そのようなことを薬剤師に情報提供してほしい」と述べ、医療従事者向け OTC 薬情報の充実をメーカー側に要望した。

また、OTC 薬の市販後安全対策についても、その充実を求めた。山崎氏は 1998 年から 2002 年までに報告された OTC 薬による副作用が約 950 症例に達すること、アナフィラキシーショックやステープンス・ジョンソン症候群など重篤な副作用も報告されていることなどを挙げ、薬剤師もこれら情報の収集に協力すべき、との認識を示した。

一方で、OTC 薬の販売に関わるキーパーソンとして薬剤師は欠かせない、との認識も改めて強調し、①生活者のニーズの把握、②ニーズに合わせた OTC 薬の選択、③十分な情報提供、④ OTC 薬による治療の限界を把握する

—といった役割を果たすよう求めた。
どの成分でどの作用・副作用か
見分けにくい

シンポジストとして講演した八王子薬剤センターの下半秀夫氏も、OTC 薬を販売する際に、薬剤師が注意しておくべき点が、添付文書情報からはつかみにくい点を指摘した。例として、多くの成分が配合されることの多い OTC 薬では、副作用の記載がどの配合成分によるものなのか、あるいは投与禁忌がどの配合成分によるものかがわかりづらいことを挙げ、生活者に合わせた OTC 薬の選択をしづらいこともあることを紹介した。

そのため同薬局では、OTC 薬のそれぞれの成分ごとに、主な作用や注意すべき点を記したデータベースを作成し、試験運用中であることを紹介した。

一方、薬剤師から生活者への情報提供の取り組みとして、同薬局では OTC 薬を購入する生活者向けに、「～の方はご注意ください」と記載した用紙を OTC 薬に添付して販売していることなどを紹介した。



会場となった共立薬科大学講堂